

倉方俊輔

「悪」のル・コルビュジェ

第7回…停泊させられた船

船のメタファーに、彼はなぜこれほど執着したのだろうか。最小限であること、動くこと、組み立てられていること、共同体であること。あるいは、水に触れること、水平線から顔を出していること、国境から自由であること、規格化されながら一品生産であること。第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期、石炭から重油へと燃料が変わって大型化した客船はさまざまな建築家たちにイメージを提供した。中でもル・コルビュジェの関心はほかにもない次元だった。表面に流線型を用いるといったような直喩ではなく、多義的に建築の本質を揺らがせる隠喩(メタファー)として、挑戦を推進する内燃機関の一つとなった。

1932年、スイスのジュネーブに姿を見せたイムブル・クラルテは、そのかつてない達成である。9階建ての中に50戸の住宅や店舗などを納めた建物は、彼が実現した最初の本格的な鉄骨構造だ。

コルビュジェは従来の建築の「つくり」だけでなく、「つくりかた」も問題の俎上に載せていた。これまでの連載では前者、つまり建築の構成に光を当ててきた。だが、後者の構法も問うていたことは言うまでもない。1914年に考案されたドミノシステムが初期の代表的なものだ。鉄筋コンクリートで水平な床と柱をつくる。その概念図に階段は描かれているが、窓も壁もない。別に階段だって、この位置になくても良さそうなものだが、規則的な根太のピッチに合わせて提案している。構造から解き放たれた窓や壁はどんな形でも取れ、階段も建築的プロムナードを構成するといった自由な「つくり」よりも、ここでは「つくりかた」に関心がある。構造とそれ以外という順序立ての問題なのだ。

—[p.23に全文掲載]



光嶋裕介「ル・コルビュジェのある幻想都市風景《イムブル・クラルテ》
～Urban Landscape Fantasia with Le Corbusier《Immeuble Clarté》」